

ものづくり 伝統工芸

●深江と鑄物

往古、深江に移り住んだ笠縫^{かさぬいし}氏の祖先は、代々、皇祖の御神鏡を守護したと伝えられています。

深江稻荷神社に天津麻羅大神という鑄物師の守り神がまつられていることから分かるように、深江は古くから鑄物とのかかわりが深い土地であったと思われます。今も深江稻荷神社では毎年11月に火焚き祭（ふいご祭）が行われています。

昭和48年（1973）の伊勢神宮式年遷宮^{しよはんせんぐう}の時には、稻荷神社前の釜師、故角谷一圭（本名＝辰治郎）さん謹作の白銅（銅と錫の合金）の御神鏡31面が献納されました。

角谷さんは、明治37（1904）年に深江で生まれ、小学校に入るが、入らない頃から炭割り、型運び、夜なべのカンテラ照らしと、鑄物師であった父親の手伝いをし、鑄物造りの修業を積み茶ノ湯釜を造る釜師になりました。

角谷さんは、鎌倉時代にはじまり室町時代に隆盛を極めたが、その後衰退し、幻の釜と呼ばれた芦屋釜の再現に取り組み、試作研鑽ののち見事に“芦屋釜”の伝統を伝える釜の製作に成功され、

昭和53年（1978）には茶ノ湯釜製作の第一人者として文化庁から重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されました。

【和鏡の造り方】

まず真土と呼ばれる砂と土を混ぜた無文の鑄型を造り、その上に和紙に描かれた下絵を置き、金属製の籠で直接文様を押しくぼめていく、いわゆる原型を用いず鑄型の製作から始める方法です。鏡背面鑄型は、湯口・湯道を造り部分強力乾燥の後、鏡面、背面の鑄型をしっかりと固定

し、地金を溶解して鑄込み、すっかり温度が冷えたところで鑄はなした後、水銀と錫で磨きあげます。

角谷さんは、20年毎に伊勢神宮の御神宝を取り替えるのは、「日本の伝統工芸を絶やさない意味でもあるんです。御遷宮のたびに新しく製作することにより技術の伝承ができるんです。……」と話されていました。

【茶釜の造り方】

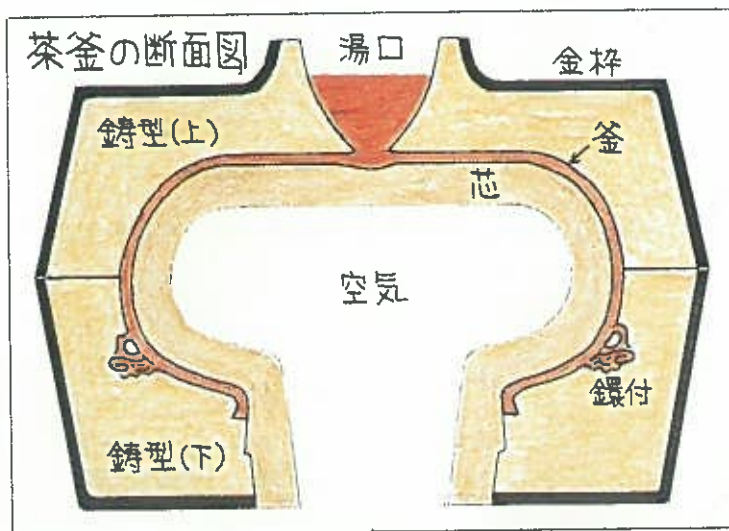
まず形を決めて紙型を切り、それを鉄板に押し、廻し形により鑄型を造ります。鑄型は、鑄物砂と粘土を混ぜ合わせて、上下、二つ造ります。

文様を鑄出す場合は、薄い和紙に墨または朱で下絵を画き、鑄型に水で張り付け、籠で押し込むようにして文様を付けます。これを籠彫^{へらぼり}とか籠押^{へら押し}といいます。

鑄付^{かんづき}は、形・文様に合わせて、松の実・結文・獅子などの型を鑄型にはめ込み釜肌^{いひみ}に付け、焼きます。

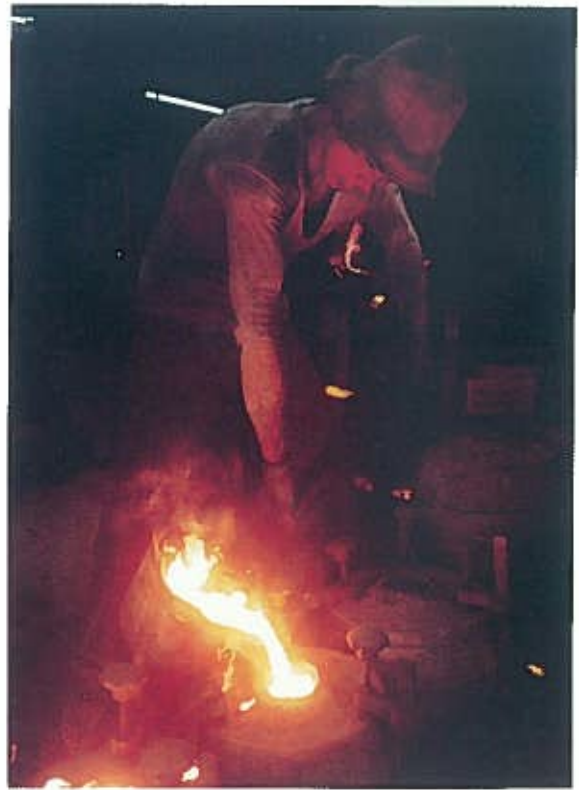
芯^{しん}を造り鑄型へ詰め込み、厚さ20³位に乾燥させて抜き取り、釜の厚さの部分^{うす}を削ります。鑄込んだ後、芯を取り出す際に土離れをよくするため芯に木炭の粉を水で解いて塗ります。また、鑄型は煙でいぶします。これも、溶解した地金が1400度の高温でも型離れをよくするためです。

出来上がった釜は更に焼いて鑄止めをし、仕上げは漆で焼き付けをします。





和銃 霞馬ノ凶繰口釜



茶釜の鑄込み



製作中の故角谷一圭氏

御神宝鏡



● 鑄物の伝統工芸技術

大谷相模掾鑄造所

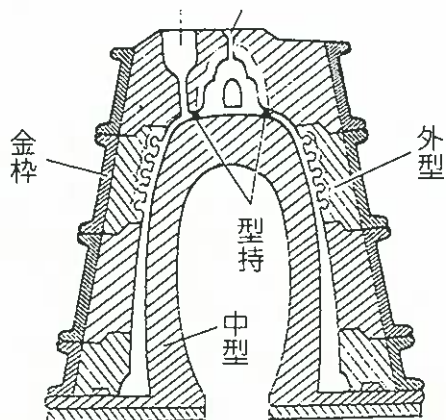
永禄初年、神社・佛閣献納品の製作を始め、昭和32年1月(株)大谷相模掾鑄造所になる。

城の復元工事では、昭和33年名古屋城天守閣の金の鯨(しゃちほこ)、福島県会津若松城、静岡県掛川城、岐阜県墨俣(すのまた)城のなど天守閣の鯨の復元製作。

寺社仏閣では、野上八幡宮の梵鐘(ぼんしょう)、平城宮跡朱雀門の復元・鷗尾(しび)及び金具一式、葎島神社青銅灯籠大修理、東大寺大仏殿大修理などを手掛け、また区内では深江稻荷神社本殿金具一式と、全国の国宝、重要文化財、城・寺社仏閣、棟飾などの復元修理を手掛けている。

鑄物は、砂や粘土などで作った鑄型に溶かした鉄や青銅(銅とすずの合金)を流し込んで作る鑄物。

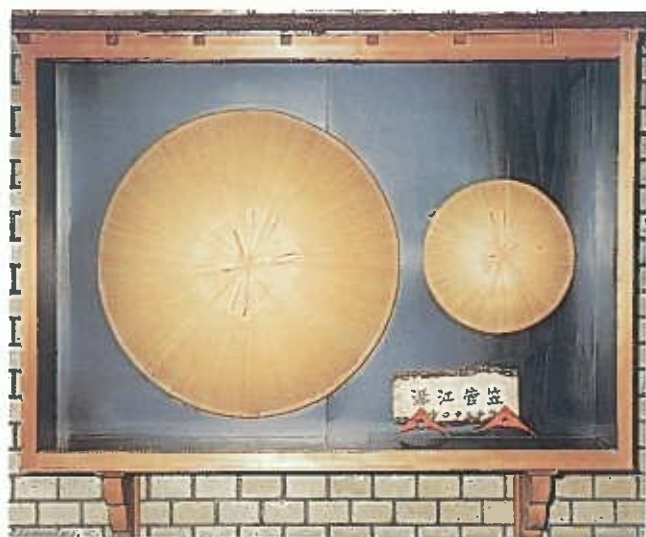
永年の鑄物作りに、大谷相模掾鑄造所代表者大谷秀一さんに、国の文化財保護審議会で平成11年度鑄物製作部門「選定保存技術保持者」に認定されました。



梵 鐘 型



● 深江の菅笠



深江菅笠

江戸時代の学者、本居宣長は「玉勝庵」という書物の中で、「笠縫島は、今 摂津国東生郡の深江村という所なるべし……」と、書いています。

昔、深江は良質の菅草が豊かに自生する浪速の一島でしたが、第11代垂仁天皇の御代に、大和国笠縫邑より、笠を縫うことを仕事とした一族が移住し、代々菅笠を作ったことから、笠縫島といわれるようになりました。

以後、歴代天皇御即位、大嘗祭の時をはじめ、20年に一度の伊勢神宮式年遷宮に使用する菅笠はすべて深江で作られ献上してきました。

江戸時代には大阪玉造の二軒茶屋を起点として、伊勢音頭をうたいながら、集団で参宮したのですが、人々は道中安全を願って、(菅には浄めるはたらきがあると信じられていました) 深江で菅笠を買って求め賑やかに旅をしました。

江戸時代の末期からは菅の釜敷きや、瓶敷き、皿敷き(今のコースターのようなもの)などの菅細工も作られ、皿敷きは明治や大正の頃には、イギリスやアメリカにも輸出されました。

菅笠作りの技術は、深江南3丁目の幸田ナミ子さんを中心に今日まで大切に受け継がれています。

また、深江稻荷神社の鳥居横には、「大阪府指定史跡摂津笠縫邑跡」の碑と、「深江菅笠ゆか

りの地」の大阪市顕彰碑が建てられています。

“押し照るや 浪速菅笠置き古るし
後は誰が着ん 笠ならなくに”

(万葉集)



奉納菅笠製作中の幸田ナミ子さん



いろいろな菅細工

●「かつら」一筋

日本で唯一の文楽、歌舞伎、舞踊、演劇等のかつらを製造。

一言に「かつら」といっても多種多様。大きく分けて、日本髪かつら・洋かつら・男性かつら・ヘアピースがある。

日本髪かつらは、結婚式に使用する花嫁用、芸妓さんが使うもの（これを業者間では「地かつら」と呼んでいる）、男性かつら、女性の洋かつらは、外国との文化交流も盛んになり、ヘアスタイルの流行も国際的になってきて、さまざまなかつらが使われるようになった。

かつら作りの原材料は主に中国から、人毛、カラ毛（ヤク牛のしっぽ）などを輸入され、羽二重通し、蓑編み、鋏、針、などで加工、整毛、洗毛、染色をして、製造出荷している。川村かつら店は、大正7年かもし屋として創業。昭和37年に川村勝美さんが、現在の(株)川村かつら店を設立。

平成8年川村勝美さんは、長年にわたる床山への技術協力、紙材料と結髪の備品の調達・修理に対し、日本芸術文化振興会国立劇場創立30周年記念功労者表彰を受ける。



ものづくり ベンチャー企業

● E T の自転車

1982年に公開された映画“E T”の中で月に向かってE Tと主人公のエリオット少年がBMXに乗って空を飛んでいるシーンの中で使用された自転車です。

このシーンで使われたBMX用自転車を製造されたメーカーが東成区にあります。

1918年に自転車部品製造が主な業務として創業開始。創業者の自転車製品設計が得意でいろいろなオリジナルパーツなどを製造販売しているうちに、普通の自転車ではなくオリジナルな製品を販売すべく海外での生産を開始。1980年代にはクワハラBMXチーム名でアメリカ国内でもトクロス競技に参加、参戦していた頃、ユニバーサルスタジオよりBMX40台の注文を受ける。

平成8年にはゴブリンと言う名前の20インチストリートバイクでヨーロッパデザイン賞を獲得、ロンドンのデザイン博物館において日本車では初めて4ヶ月間展示されました。日本国内でもゴブ

リンは中小企業優秀賞を受賞しました。

最近はオリンピック種目にもあるDH(ダウンヒル)や、パラリンピックタンドム(2人乗り)競技用自転車も手掛けています。

(株)桑原インターナショナルは、シドニーで行われるパラリンピックタンドム競技日本代表用の自転車として使用されます。



ものづくり文化

《ものづくり文化の広場では》

大人も、こどもも作ることの大切さ、楽しさを未来に伝えていくこと、おもちゃを介して、人と人との出会い、交流の場をつくり出すことを目的として、ものづくり文化の広場がある。

●小さなおもちゃの博物館

東成区大今里西にある大阪セルロイド会館内に小さなおもちゃの博物館がある。

昭和初期に建てられた大阪セルロイド会館の3階に博物館をオープンしたのは、1998年4月1日、「おまけ博士」と呼ばれる宮本順三(85歳)館長がペンネーム「ズンゾ」と豆のように小さなおもちゃ「豆玩具」から「おまけやズンゾ」として開設した。

小さくても夢いっぱい博物館には、世界のおもちゃや郷土玩具も展示され、その数3000点にもおよぶ。

大正・昭和・平成とそれぞれの時代を反映したおもちゃは、大阪の古い郷土玩具・生玉人形や角力人形、住吉の俵蔵出し、猫とねずみなど、当時の大阪人のゆったりとした遊びごろをしのばせる。

宮本順三館長はグリコに入社「おまけ係」として数々のおまけを考案され、また、世界中の小さなおもちゃや民芸品、郷土玩具のコレクションもされ、その一つ一つに込められた「作った人の心と手のぬくもり」を訪れる人に伝えたいとの思いから小さなおもちゃ博物館をつくられた。

この博物館の建物は昭和12年に櫛会館として完成、昭和5年建設された区役所旧庁舎と酷似した大阪セルロイド会館は当時としてはモダンな建物で昭和初期のレトロな雰囲気も現在も残している。

「おまけやズンゾ」は月曜日休館、開館日は火～日曜日・祝日(一般)、団体は火・水・木で(予約必要)。開館時間は午前10時～午後5時まで。また、季節毎におもちゃ作り教室なども開催しています。

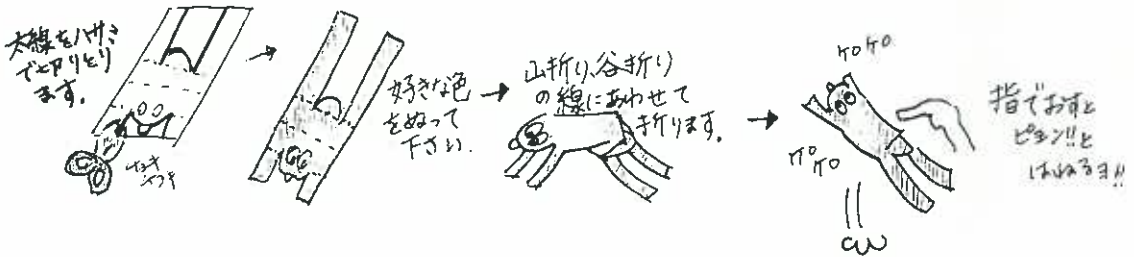


紙工芸 作り方

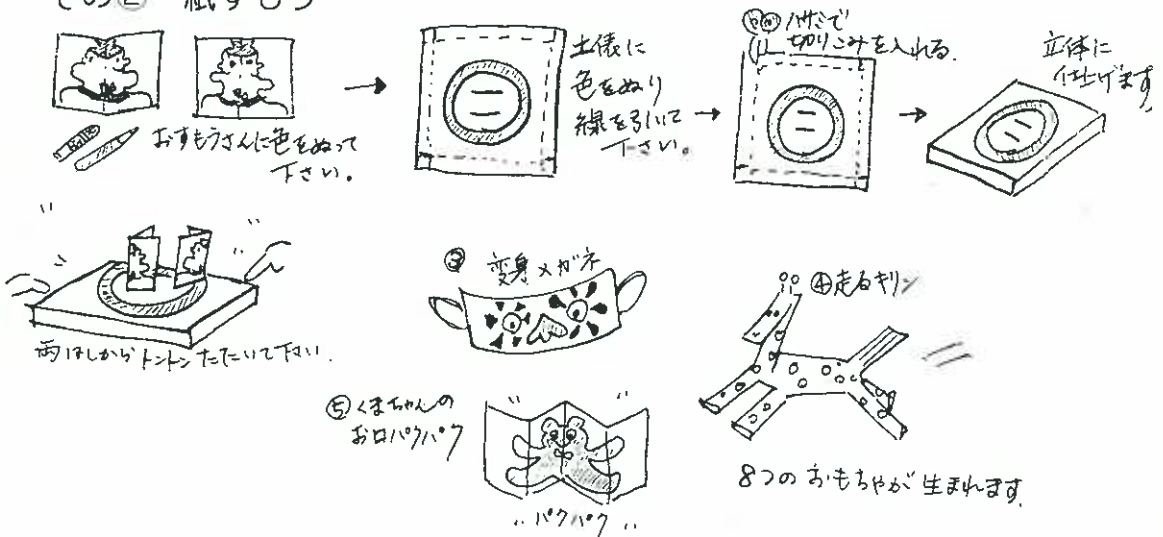
一枚の紙からいろいろなおもちゃが生まれる!!

～おまけ博士のアイデアおもちゃづくり～

その① 飛び跳ねかえる (テーマ・創意/工夫)



その② 紙ずもう



●深江の菅細工

深江は良質の菅草が豊に自生する土地で、昔から菅細工が盛んに作られていた。

江戸時代には伊勢参宮の際には「笠を買うなら深江が名所」と謳われたほど有名で、菅笠を買い求める事が旅の常となっていた。

現在も菅笠作りを初め釜敷きや、瓶敷き、円座、皿敷き（コースターのようなもの）なども作られて受け継がれている。

現在深江では原材料が自生しなくなり、菅のほとんどが富山県など北陸地方から取り寄せている。また教育学習などで使う菅を学校の校庭にも自生させればと努力している。

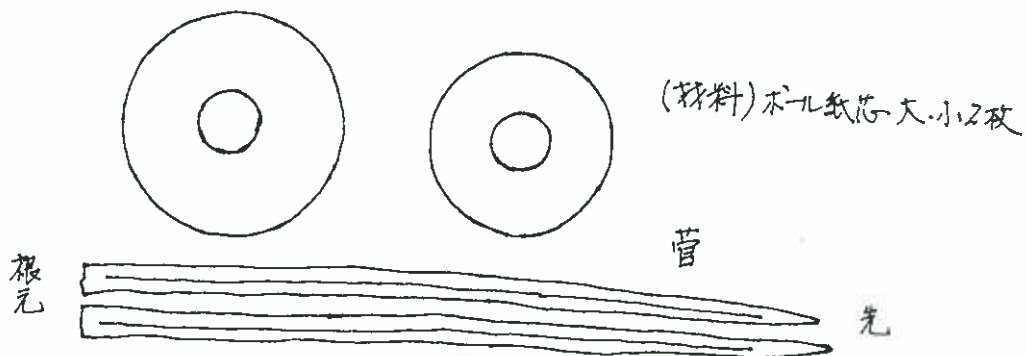
この伝統ある菅細工を将来にわたって、保存・活用するため平成11年11月に「大阪市指定無形文化財」として深江菅細工保存会が認定された。

深江菅細工保存会では教育研修会や、地域などを通じて伝統工芸を“楽しく”広めようとコースターづくり等を行い努力されている。



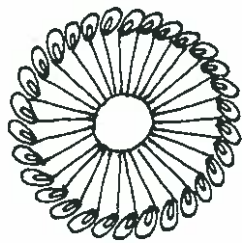
管細工の作り方

管びん敷工程表



(工程)

- ① 大小のボール紙芯を重ねる
- ② 管を根元の方からボール紙芯の下より差し込む
- ③ 管でボール紙芯をはさんで重ね合わせ、4cm程でカット
- ④ 先端の4cmの部分を右廻しにひねる
- ⑤ 光の工程でひねり巻きた部分を手前に1目作り余った先端を2枚のボール紙芯の間に差し込み固定する
- ⑥ 工程②～⑤までを順次くりかえし仕上げる



仕上り

●トンボと自然を考える会

トンボの楽園ができれば。大阪につくったらとの思いは、誰しも考えることです。

小学校のグラウンドの端にトンボ池をつくっているとところもあると聞きます。

開発に追われてどんどん消えていく、トンボ、メダカ、カエル……。

これらの生きた姿を見せる事、世話をする事で、環境教育、情操教育に役立たせるのが狙いです。「東成区ものづくり文化の広場」がつけられたのも、まちづくりとしてみんなで考える事の大切さ、ものづくりの大切さを学んで行くことです。

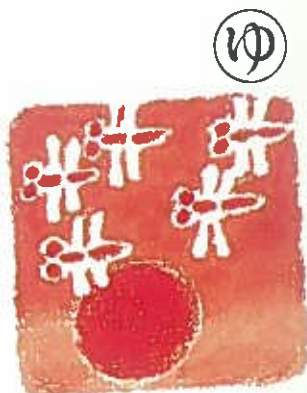
☆心豊かにし、創造力を高める手づくり。

モールトンボは、カラフルなモールをねじり、動く目玉をつけ、カラーペーパーの羽をつけ、それをピアノ線に通して、淀川沿いに生えているセイタカアワダチソウの茎にとりつけると、ユラユラと揺れる楽しいトンボのおもちゃの出来上がり。

次いでセミのおもちゃ、昔からある竹製のものを現代風にアレンジ。紙を主体として誰でも手軽に作れるように工夫をし。セミのイラストを自分



トンボの岡田さんと子供たち



夕焼けの
空にたくさん
トンボとさん



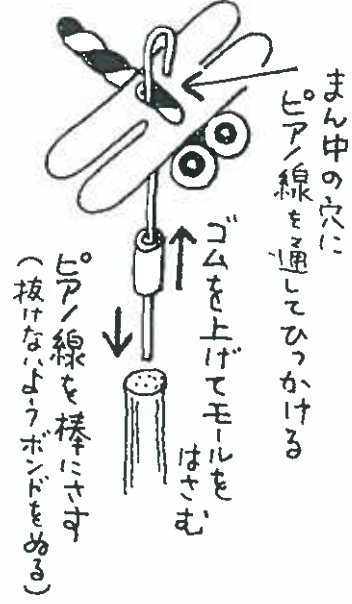
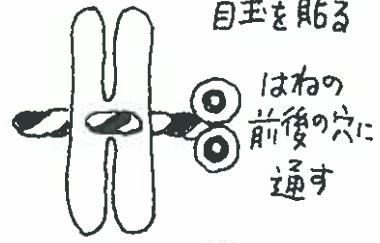
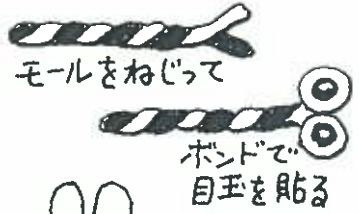
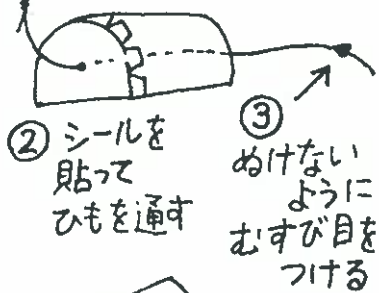
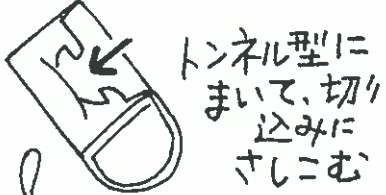
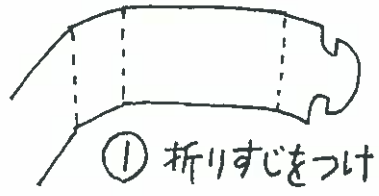
で描き、クラフトとアートの楽しみを取り入れた一石二鳥の作品です。

十年程前から東中本小学校で毎年トンボ教室を開き、児童にトンボのお話とおもちゃ作り、トンボかるた、紙トンボ、モビールトンボ、トンボブンゴまなどいろいろなおもちゃを作ってきました。

(社)トンボと自然を考える会、理事のオルファ(株)取締役の岡田三朗さん(65歳)は、高知県中村市にある清流四万十川でトンボ保護区ができ、全国に広がって、自然を考えた環境教育、情操教育にも役立てている。

つくることは暮らしの原点、東成区のものづくりの現場を見せていただき、また人々と交流し、楽しく勉強していきたいと思っています。

トンボとセミの作り方



●ものづくりのまち見学会 (平成11年11月29日(月) 午後1時から実施、参加20名)

◆豆玩舎(おまけや) ZUNZO

(大今里西2-5-12 大阪セルロイド会館3F)

「豆玩舎ZUNZO」博物館は、遊びの知恵と工夫を子どもたちに教えるとともに、大人と子どもの交流の場を作り、ふるさと大阪の遊びを伝え、世界の玩具や民芸品のコレクションを通じて、世界の大衆文化に触れ、おもちゃ作りを通して物を大切にすること、創意工夫の楽しさを経験する場を目的として開館しています。



◆玉初堂(線香)

(中道1-5-13)

「香り」を創って190年。お香、お線香の製造元です。

創業は文化元年(1804)、香りの文化は遠く平安の昔に始まり、根強く時代とともに生き続けています。また最近では「お部屋で楽しむ香り」として楽しまれています。



◆(株)オルファ(カッターナイフ)

(東中本2-11-8)

オルファは、1956年に「折る刃」式カッターナイフの第1号として創案。

安全性を第一に考えたいろいろなカッターナイフを開発し、国内及び世界にも名の通った会社です。

“切る”ことが生み出す無限の可能性をサポートしています。

